

研究分野のキーワード：体育，スポーツ，運動技術，動感，促発指導，動感構造

研究紹介

子どもは、「できる」ようになると喜び、自信を持つようになります。ですが、最近は運動の苦手な子が増えているようで、従来よりもきめ細やかな指導が求められています。このような事情は、私が専門種目としている器械運動ではより顕著になっているように思われます。

器械運動に関する私の研究課題は、個に応じたきめ細やかな指導ができるようになるには、「どのような能力を」指導者は身につける必要があるのだろうか、その能力を「いかにして養成する」のがよいのだろうかということをはっきりと明らかにすることです。

さて、運動が苦手の代名詞として“運動音痴”という表現が使われることがあります。しかし、“運動音痴”は生まれつきではなくて、生育環境によるところが大部分だと言われます。つまり、生まれてからの学習環境が恵まれていると“運動音痴”にはならないということなのです。とくに幼児期・就学期初期の運動経験が豊かになされることが重要だということが分かっています。それでは、「どのような運動経験を」子どもたちに積ませるのがよいのでしょうか。これも私の関心事です。

また、「できないことをできるようにする」ことについても興味をもっています。「できない」にもいろいろな「できなさ」があります。課題に取り組む気が起きないどころか「拒絶してしまう段階」から、「やる気はあるがどうしたらよいのか全く分からない段階」、「試行錯誤はしているが五里霧中の段階」、「今はうまくいかないが続けていけばなんとかかなりそうな気がする段階」など。「できる」にも、「まぐれあたりの段階」、「洗練したフォームでできる段階」、「即興的に対応して解決できる段階」、「極度の緊張下でも高度なレベルでできる段階」などいろいろあります。

これらの学習段階（動感地平）に応じて解決して身に付けていく課題があるといわれますが、その具体的な内容は運動形態の種類によって異なります。サッカーと器械運動では異なります。鉄棒運動の「逆上がり」であっても、人によって解決すべき課題は異なってきます。できないことをできるようにする指導（動感の促発指導）には、個人に応じた学習課題を見抜く力、個人に応じた学習の道筋をつける力、コツやカンの動感情報を学習者と交信する力などが指導者に要求されます。このような動感指導に関わる諸問題について私は勉強しています。

この他に最近では、なわとび運動の「連鎖交互とび（チャイニーズホイールやビーズとびなわとも呼ばれます）」の教材化に取り組んでいます。この跳び方の基本形態は、二人横並び、お互いのなわの端を交換して握り、それぞれが半周ずらしでなわを回します。このなわとびは子どもが夢中になって取り組む可能性をもっていると私は考えています。夢中になって運動するところには「学び」があり、結果として体力も向上するでしょう。そのような魅力ある運動（遊び）教材づくりにも私は興味をもっています。